

『太平記』卷三十六、細川清氏失脚記事の再検討

小秋元, 段 / KOAKIMOTO, Dan

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

69

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

2004-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010082>

〈論文〉

『太平記』卷三十六、細川清氏失脚記事の再検討

小 秋 元 段

はじめに

『太平記』第三部は大きく見て、観応擾乱から文和内乱までを描く前半部と、新將軍足利義詮のもと繰り広げられる有力守護大名の抗争史を描く後半部とに分けられる。このうち、後半部の世界を彩るのは、仁木義長・畠山道誓（国清）・細川清氏・斯波道朝（高経）といった大名たちである。彼らの失脚から反抗、そして帰順または滅亡までの物語がめまぐるしく配列されるのが、第三部後半部の特色だといってよい。

よく知られているように、第三部後半部のストーリー展開は、卷三十四「吉野御座上北面夢之事付諸国勢帰京都事」において、予め見通されている。即ち、南方伺候のある上北面が、通世を決意して吉野の後醍醐天皇陵に通夜参詣する。その折の夢に日野資朝・俊基の両名が後醍醐天皇に、摩訶首羅王の

前の議定によって逆臣討伐の討手が定められた旨を奏上するさまを見る。そこでは仁木義長・細川清氏・畠山道誓らが討伐の対象としてあげられており、彼らが南朝方の怨霊によって滅ぼされるだろうことが示唆される。仁木は卷三十九で窮迫して幕府に帰順。清氏と畠山は卷三十八で滅亡が描かれる。本話が卷三十八乃至三十九前半までの物語において、構想上重要な役割を果たしていることがわかるだろう。

一、清氏失脚記事の問題点

ここにとりあげる卷三十六「志一上人上洛清氏叛逆露頭即没落事」¹は、時の執事細川相模守清氏が佐々木道誓と対立の末、京都を没落するまでを描いている。中でも妖僧志一上人の言を巧みに利用し、道誓が清氏を陥れるくだりは、『太平記』中でもスリルに富む、出色の一場面である。

『太平記』において清氏の失脚は、仁木、畠山の失脚につづく大事件として位置づけられている。『太平記』ではその原因を清氏と道誓の対立に求め、両者の間に起きたトラブルの数々を披瀝する。そして、清氏が自身の子の元服を石清水で行ったことに將軍義詮が疑念を抱いていた折、道誓は清氏の叛意を裏づける願書を提出。これを陥れることに成功する。

「志一上人上洛清氏叛逆露頭即没落事」の一段のうち、道誓が清氏を陥れる条は、段の前半部にあたる。この記事を長谷川端氏は以下の九場に整理された（このうち、①を前半・後半に分けたのは、筆者の判断による。本記事の異同を論じるにあたり、このように処理することが適切と考えた²⁾）。

① 志一上人、道誓の許に寄ること。

（前半）志一、道誓のもとを訪れること。道誓、志一に暮らし向きを問うこと。

（後半）志一、道誓に上洛の理由を答えること。

② 上人に対する作者の考え。

③ 上人、清氏の依頼について話すこと。

④ 道誓、清氏の願書を伊勢入道の許へ持ち込むこと。

⑤ 願書の内容。

⑥ 願書を見ての伊勢入道の考え。

⑦ 義詮平癒して、道誓のいうままに清氏の呪詛を信ずること。

⑧ 義詮、八幡社に清氏の願文を出させること。

⑨ 上人上洛の理由。

さて、清氏失脚記事の最大の問題点は、諸本に大幅な異同が

あるということである。すでにこの点についても、長谷川氏によつて論究がなされている³⁾。まずは異同の概要を、氏の整理に補訂を加えて掲げることとする。

A ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨をすべて有するもの

神田本・西源院本・神宮徴古館本・玄玖本・宝徳本・

京大本

B ①（後半）②③④⑤⑥⑦⑧⑨を欠くもの

吉川家本・米沢本・毛利家本・梵舜本・今川家本・天

正本・中京大本

C ①（後半）②を欠くもの

南都本・相承院本・前田家本・流布本

このように、異同は①（後半）②③④⑤の記事の有無に関わるものである。①から⑨までの記事をすべて有し、本文の最も詳細なA系統は、神田本・西源院本等が属するように、甲類本、即ち古態本のグループといえる。これに対し、記事分量の最も少ないB系統は、乙類本の殆どと天正本（丙類）が属する後出本のグループである。C系統は南都本系とその影響を受けた諸本のグループである。

本文に即して異同の様相を、もう少し詳しく見てゆくことにしよう。まず、本段は、

①（前半）佐渡判官入道道誓これヲ聞て、スハヤにくしと思つるさかミの守か過失ハ一ツ出来ニけるハと、ひとりエミシテ數ニ瞋^{クレ}じ居たる処ニ、外法成就ノ志一上人かまくらより上りて、判官入道ノもとへおハしたり、さま／＼ノ物かたりシテ、「さて也都ハかへり旅ニて、よろつ便リナキ御

事にてこそ候らメ、たれか檀那二なり奉り、祈なんとの事ヲモ申入候ゾトとハれけれハ、

という記事からはじまる。ここで道誓は志一上人に向かい、傍線部1のように都での暮らし向きについて尋ねる。これを受け、A系統の諸本では、

① (後半)²何となく古郷にて候らへハ、京都もなつかしく候上、畠山聊管領ニ申事候らとて、其為上洛したりとぞ申ける、

という応答がなされ、志一は畠山の命を帯びて清氏のもとに赴くため、上洛したのだという目的を語ることになる。そして、これにつづいて、A系統では、

② 此志一上人ハもとより邪天道法成就ノ人なる上、近比かまくらにて諸人奇特ノ思ヲナシ、皈依アサからさる上、畠山入道諸事深ク信仰たのミ入て、関東ニてもふしギ共現じける人也、仍道誓やかて心バヤキ者にてあやしくて、さてもいかやうなる題目ヲカ申されつらんト、色々ニ氣ヲとりて尋けるニ、始ハ分明に其子細ヲハのべさりけるか、いか、思ハれけん、一法成就ノ人なれハ、人々ノ果報ヲさと、とても武軍傾かたく、此人々薄運なる所也見ヌかれけん、これホと深クたのミきられて京迄のはせられけるニ、此事共アあさしく次第二のへられけるもふしギ也、

と、②の記事が配される。ここでは、志一が幕府転覆の略を道誓に話してしまったこと、志一が重大な情報を漏らしてしまったのは、武家の運勢が尽きず、畠山・清氏が薄運であることを察したからだということが説明される。このあと③の記事

が以下のようにつづく。

③ 此僧の給ひけるは、³末タかひくしき知音檀那も候ハて、いつしか在京叶がたき心なして候らヒつるに、細河さかミ殿よりこそ此両三日が前に、一大事ヲ所願候、頓ニ成就アルヤウニ行てたひ候らへとて、願書ヲ一通封テ、供具ノ料足ニ用途一万疋そへて送られて候ラヒしかとかたり給ひけれハ、道誓何とナキヤウにて何事の所願ニてか候らん、其願書召よせられ候へ、ソト見候て返し進し候はんと思切ニ所望セラル、ナマシイニかたりハ出しツ、あまりにおしまん事も叶かたけれハ、力なく此願書ヲとりよせて披見せさせける、

志一は清氏から重大な祈願を依頼されていたことを語り、結局は道誓の懇請に負け、願書を差し出してしまふ。一方、BC系統の諸本では、①(後半)と②の記事を持たないから、畠山の謀叛の計略や、志一が清氏のもとに派遣された事情は語られない。志一は傍線部1のごとき道誓の問いを受け、清氏より祈願を依頼されたことを語るという簡略な筋となる。

③以下の記事は諸本とも概ね等しく(天正本にはやや独自の記事あり)、道誓は入手した願書を清氏謀叛の願書だとして伊勢入道に提出することとなる。「敬白 吒祇尼天ノ宝前」と記された願書には、清氏の四海管領、義詮の死去、関東の足利基氏の降伏の三箇条がしたためられていた。折節、義詮が病悩に陥る。道誓はこれを清氏の呪詛によるものと訴えたため、義詮はこの言を信用する。そして、A系統の諸本には、八幡にも同様の願書が籠められていたことが発覚したという④の記事が

あり、つづいて、

⑨ 凡ソ志一上人ヲのほせられけるも、畠山我奇特の人と思
ヒ、同心ニ京関東ヲとらんとて、其祈禱ノ為に畠山ノ吹挙
ニて上られけり、

との評言がくる。ここでは畠山の野心と志一上洛の理由が説明され、①（後半）と②の記事を補完する。つまり、A系統の諸本は、事件の背後には畠山による幕府転覆の陰謀があったと、終始説明づけているのである。一方、B系統の諸本では、⑨のみならず①（後半）と②の記事も持たないことにより、こうした視点は存在しない。

以上、A・B両系統の間には、質・量ともに規模の大きな異同があることがわかった。当然、どちらを先出の本文と認めるかにより、清氏失脚記事の本来の姿のとらえ方も変わってくる。作者は当初、どのような意図をもってこの事件を叙述したのだろうか。また、その本文の改修にあたつては、どのような配慮が施されたのか。作品理解にとつて極めて大事な課題といえるが、この問題に関する先行研究としては、前引の長谷川氏の論があるばかりであった。よつて、次節では氏の論を詳しく見てゆくことにしたい。

二、長谷川説をめぐつて

長谷川氏の論攷「細川清氏」は、『太平記』第三部全体を見渡した清氏論となつてゐる。そこで氏は、清氏は武勇の人、君臣の道を重んじる人として、作者によつて共感をもつて描かれ

ていると結論されている。勿論、微細に見れば、清氏は全面的に好意をもつて描かれてゐるわけではなく、彼の振る舞いは時には倨傲、軽率なものとして批判されることもある。だが、ここで押さえておきたいのは、清氏像についての氏のこうした理解が、以下に見る清氏失脚記事の解釈と不可分の関係にあるということである。

長谷川氏はA系統・B系統の本文の意味するところを、つぎのように読みとられている。

参考本においてはこの一段（①（後半）と②に相当の記事。小秋元注）を西源院本から引いて、「文義不分明、蓋有脱文」としているのであるが、この段は⑨と非常に有機的に関連しており、国清による幕府転覆の陰謀があったという太平記作者の考えを打ち出しているものと考えられよう。この部分は、神田本、西源院本、および玄玖本の類以外の諸本では「判官人道……誰力檀那二成奉テ祈ナントノ事ヲモ、申入候ト問ハレケレハ、未タ甲斐々々敷智音ノ檀那モ候ハテ……」（米沢本）のようになつてゐる。②⑧⑨を欠く相承院本、前田家本・米沢本、天正本の形（B）の方が、「何となく『古郷ニて候らへは京都もなつかしく候上畠山聊管領ニ申事候らヒて其為上洛したり』とそ申ける」及び②の一段があつて、それに接続して「此僧の給ひけるハ未タかひかひしき知音檀那も候ハテ……」となる神田本や西源院本および玄玖本の類（A）の文よりも通りがよくなつてゐることは確かである。参考本が「文義不分明」としたのは無理のないところであり、一見挿入かと疑われ

る②の部分は、⑨と呼応しているために、作者の意図に反して、国清・清氏による共同の陰謀があつたかにとられそうな混乱を文詞のなかに含んでいる。しかしながら、実際には、作者の意図は、幕府顛覆の陰謀は国清個人によるものであつて、国清は清氏を誘いこむために志一上人を上洛させたのだ、という点にある。

引用が長文に及んだが、長谷川氏の見解はこうである。まず、A系統の本文で、②の記事は本文上の混乱を来しているものの、畠山の陰謀について触れる⑨の記事と結びつく、重要な部分である。ここには、幕府転覆の陰謀は畠山個人によるもので、清氏にはもともとその意志がなかったという主張がこめられており、そのように描くことが、作者本来の意図であつた。『太平記』では清氏は義詮の嫌疑を受け、京都を没落する段になつても、なおも幕府に恭順の意を示そうとする。長谷川氏は右の引用部につづけて、こうした事例をあげながら、作者が清氏に叛意があつたとは認めていなかったことを説明づけられる。

このような解釈に立つ長谷川氏は、つづいて諸本の先後関係を次のように論じられる。

以上の三カ所（清氏が没落してもなお恭順の意をあらわす三場面。小秋元注）からも理解されるように、太平記作者は、清氏に謀叛の志を認めていないわけであり、この観点からいえば、前述の②⑧⑨を欠いている諸本の方が一見、作者の考えを文詞の混乱なしに出していると考えられるけれども、それでは右の(二)に見られるような畠山国清の

謀叛へつながつて行く線が弱くなることに注意しなければならない。と同時に、義詮・清氏離間工作を行なった道誓の「謀計」も薄められていることに気付く必要があるであろう。今川了俊すらも「或人」といつて、はつきりとは書かなかったのである（それは多分侍所の四職の一である京極氏に対する遠慮からであろう）。従つて、ここで①から⑨にいたる本文の前後関係を考えるならば、やはり、内容的に混乱を示している神田本・西源院本および玄玖本の類（A）の方が前であり、②⑧⑨を欠く諸本（B）は前者の詞章を分かりやすくしようとして削除したものと考えられよう。或いはそこに、政治的圧力があつたことを考える必要があるかも知れない。いずれにしても天正本に見られるような道誓およびその一族に対するある種の傾斜は考慮しなければならない。②を欠き、⑧⑨を有する南都本・梵舜本および流布本の類（C）は、畠山国清に謀叛の志があつて細川清氏にはそれがなかったことを書きたかつた作者の意図を忘れて、両者を折衷したものといえないであらうか。

つまり、清氏に叛意があつたことを認めない『太平記』において、②⑧⑨の記事を持つA系統の本文こそ、先行するものである。長谷川氏によれば、この系統の本文は、清氏失脚事件の背後に畠山による謀叛の企てがあつたことを述べ、同じく畠山の陰謀について言及するのちの記事（巻三十七「楊貴妃事」の冒頭の一節。長谷川氏が論文中で引用した(二)の記事）との対応をよく保つという。また、清氏を陥れた道誓の謀計がより

際だつて描かれるのが、A系統の本文だとも指摘される。これに対してB系統の本文は、A系統の本文のわかりにくい部分を整理した形態だとされる。そして、そこには道誓の謀計の要素を薄めようとする政治的圧力が働いたのではないかと推測されている。また、C系統の本文については、AB両系の折衷であると考えられるが、この点に関しては筆者も同様の考えである。

長谷川氏のこうした見解は、論攷「細川清氏」の初出以来基本的には変わっておらず、後年執筆された「太平記の成立と難太平記」（『太平記——創造と成長——』三弥井書店、二〇〇三年。初出、一九九四年）でも、同様の見解が示されている。また、同氏校注の新編日本古典文学全集『太平記④』（小学館、一九九八年）二四二頁頭注でも、短文ながらこうした考えがまとめられている（当該巻の頭注の執筆は長坂成行氏）。

三、本文の検討

右のような長谷川氏の見方は、A系統に属するのが神田本や西源院本といった古態本系の諸本であることから、ごく自然に受け入れられた。B系統に属するのは後出の諸本であり、こちらの本文が先行することは、本文系統の常識からいって考えがたいことであつた。

だが、A系統の本文には不審な点も少なくない。事実、長谷川氏も『参考太平記』が①（後半）から②にかけての記事を「文義不明、蓋有脱文」と注したことを「無理のないところ」と認めておられるし、自身その記事を「一見挿入かと疑われる」とも評しておられる。一方、B系統の本文については、②の記事を持たない点で「神田本や西源院本および玄玖本の類（A）の文よりも通りがよくなっていることは確かである」と指摘され、清氏に叛意を認めていないという作者の意図についても、B系統の方が「一見、作者の考えを文詞の混乱なしに出していると考えられるけれども」と一定の理解を示しておられる。

長谷川氏の結論に立つた場合、清氏失脚記事の本文は、混乱を含んだものから、より整ったものへと改修されたと理解することができ。確かに本文流動の過程で、わかりにくい本文が、わかりやすい本文へと改められることはよくある。しかし、本文の先後関係を常にそのように説明できるわけでは勿論ない。さしあたり、A系統の②の記事について見るならば、その文詞や前後のつづき具合の不自然さは、本来の本文に不純物を挿入した結果、生じたのではないかと疑念が残る。

まず第一に、道誓と志一の間答のかみあい方について見てみよう。A系統では、さきに引用した本文①（前半）の傍線部1の「さても都はかへり旅にて、よろつ便リナキ御事にてこそ候らメ、たれか檀那二なり奉り、折なんとその事ヲモ申入候ゾ」という道誓の問いかけに対して、志一は①（後半）の傍線部2で「何となく古郷にて候らへハ、京都もなつかしく候上、畠山聊管領ニ申事候らして、其為上落したり」と答えている。これを受け、②の記事がつづき、このあとさらに志一は③の傍線部3で「未タかひくしき知音檀那も候ハて、いつしか在京叶がた

き心なして候らヒつる二」と答えている。

傍線部1で道誓は、都に上つてきた志一の窮状を案じ、檀那がついているのかと尋ねる。A系統の本文だと、これに対して志一は故郷であるから京都も懐かしい、その上、今回は畠山から清氏へ使者の役目を負つての上洛なのだと答えている。果たしてこの問答はかみあつていのだろうか。B系統では、①（後半）と②の記事を持たないから、このくだりは、

……サテモ都ハ飯り旅ニテ、万ツサコソ便り无キ事ニテヲハスラン、誰カ檀那ニ成奉テ、祈ナントノ事ヲモ申入候ト問レケレハ、³未タ甲斐々々敷智音ノ檀那等モ候ハテ、イツシカ在京叶難キ心地シテ候ツルニ……（米沢本）

となる。よつて、傍線部1に対する志一の答えは、傍線部3のように、いまだ頼りがいのある檀那はいない、早くも在京は困難と思つていたところ……、ということになり、道誓の問の内容によく対応する。A系統のような受け答えが、必ずしも問答の破綻を示しているというのではない。しかし、B系統の本文の方が志一の窮状、檀那の有無をめぐる問答としては、より自然ではないだろうか。長谷川氏もB系統のこのくだりを「通りがよくなつていゝ」と評価されるが、通りがよいというよりも、これこそが本来の本文ではなかったかと考えたくなる。

仮にA系統の本文で読んでゆくと、道誓の問いに対して、志一はまず傍線部2で、京都も懐かしい、しかも今回は畠山の依頼による上洛なのだ（従つて、経済的困窮は想定しがたい）と答えておきながら、そのあと傍線部3で、頼りになる檀那がおらず、在京もかかないがたいと愚痴をこぼす形態となる。これは

明らかな矛盾であろう。こうした矛盾は、傍線部2を含む①（後半）と②の記事が、後文への配慮を欠いたまま挿入されたために生じたと見て間違ひあるまい。

もう一つA系統の本文には、気になる語がある。それは①（後半）の「畠山聊管領ニ申事候らヒて、其為上洛したりとそ申ける」というくだりの、「管領」という語である。いうまでもなく、ここでの管領とは清氏のことを指す。しかし、『太平記』では清氏を職名で呼ぶ場合、執事と呼ぶのが常であり、管領と呼称する箇所はほかには見えない。⁴『太平記』で管領と称されるのは、清氏以後の斯波道朝と細川頼之のみである。

ちなみに清氏の執事就任を記す『後深心院関白記』延文三年十月十日条には、

武家管領⁵事、可為相模守源清氏云々、

とあつて、清氏の頃には管領・執事両方の称が用いられていたことがわかる。小川信氏はこの記事に関連し、管領の職名は特定時点において制定されたものではなく、慣習的な職称が漸次定着していったものだととして、最終的に管領が一般化し、執事の呼称が用いられなくなるのは、細川頼之の代から斯波義将の二度目の管領在任時のことであると述べられている。⁵よつて、当時は両方の呼称が並行していたと考えられ、その点で志一が清氏を管領と呼ぶことは問題にしていない。しかし、前述のとおり、『太平記』ではいま問題にしている箇所以外で清氏を管領と呼ぶことはない。そのことを重視するならば、ここは単純に①（後半）の詞章がある段階になつて増補されたため、管領の称が用いられたと考えた方が理解しやすい。

このように清氏失脚記事において、①（後半）と②の記事はのちの増補によるものではないかと考えられる。だとすれば、⑧⑨の記事も増補と見るべきで、少なくとも本章段において、A系統はB系統に対して後出の本文を持つことになる。しかし、A系統には甲類本が、B系統には乙類・丙類本が属していた。乙・丙類本の本文が甲類本の本文より先行するなどということは、あり得たのであろうか。

話が拡がるので本稿では要点のみだが、そもそも巻三十六における諸本文の先後関係は、他の巻のようには考えられないのである。その異同を見てゆくと、乙類・丙類本の本文が簡略であつてしかも先出、逆に甲類本の本文が増広されたのではないかと思われる箇所が、いくつか存する。つまり、巻三十六の本文は当初、乙類・丙類本のごときものとして成立し、比較的早期にそれが改編され、甲類本のごときが成立したという事情があつたのではなからうか。そして、甲類本の本文が古態本系のスタンダードな本文として定着する一方で、本来の本文は当初広まらず、あとになつて乙類・丙類の諸本に引き継がれていったのではないか。こうしたありようは他巻に比して確かに異例だが、その本文の成立と流伝にはこのような経緯を想定することが可能と思われる。

四、本来の清氏失脚記事とその展開

以上、太平記巻三十六「志一上人上洛清氏叛逆露頭即没落事」中の清氏失脚記事は、B系統の本文に本来の姿を認めるべ

きであることを述べてきた。では、この系統の本文に従つて清氏失脚記事を読んだとき、作者の意図はどのように読みとることができらうか。

まず、B系統の本文では、志一は畠山によつて派遣されたという設定にはなっていない。上京したものの檀那もつかず、在京も困難と思われた時期に、たまたま清氏より祈禱の依頼を受けるという筋立てになつてゐる。そして、志一は道誉との四方山話の中でこのことを語るのだが、清氏の祈願の内容は明示されていない。重大な祈願であつたことは文中より察せられるが、B系統の本文では、畠山の陰謀のことや畠山が清氏を味方に引き入れようとしたことは語られないから、少なくともそれが幕府転覆のための祈願であつたと読みとれる文章にはなっていない。しかし、この話を聞いた道誉は、強いて願書を借り受け、清氏謀叛の証拠を仕立て上げてしまふ。つまり、道誉はもとも幕府転覆とは関係のない願書をもとに幕府転覆の願書を捏造し、清氏を無実の罪に陥れたと描くのである。

道誉が清氏の願書を伊勢入道のもとに持参するくだりは、記事④から⑤にあたり、つぎのように始まる。

道誉此願書ヲ内へ持て入て、只今ちと急事候間、外へ罷出候、此願書ハ閑に見候らて後二返進候へし、明日はへ御渡候ラへとて、後ノ小門より出ちかひけれハ、志一上人重ていゝる、ニ詞無ッして宿所へソかへり給ひける、道誉其翌日、此願書ヲ伊勢入道かもとへ持て行て、……

すでに長谷川氏も指摘されたが、志一に明日返却すると約束した願書を、翌日伊勢入道のもとへ持参したというのだから、こ

の間に道誓は志一に返却する願書とは別の願書を作成し、伊勢入道に提出したという読みとりが可能である。このあと伊勢入道は「手跡ハたれ共しらね共、判形ニおいてハ疑ヒなければ」とは思うものの、「かゝる事ニハ謀作謀計なんとも有ゾかし」と、事の真偽を定めかねている。道誓の願書偽作は明確には書かれていないが、そのように読める余地が確保された行文だといえるだろう。

このようにB系統の本文をたどって読めば、清氏は畠山から謀叛の勧誘を受けたこともなかったし、彼自身にも叛意などなかったことが明確にわかる。そうした清氏が義詮の嫌疑を受けて失脚しなければならなかったのは、すべて道誓の画策によるのだというのが、B系統の本文の主張なのだろう。さきに見た長谷川氏の論では、作者が清氏に叛意があったとは認めていなかったことを指摘していたが、この点は筆者も同意見である。しかし、のちにA系統の本文を検討するが、こうした作者の認識はB系統においてのみあり得たものと考ええる。京都を没落した清氏がなお義詮に恭順の意を示し、最後まで叛意を持っていなかったというのちのくだりも、B系統の本文を通して読んだ方がより自然に結びつく。また、長谷川氏はB系統の本文について、「義詮・清氏離間工作を行なった道誓の「謀計」も薄められている」と評されたが、果たしてそうであろうか。願書を偽作したと読み得るのはB系統の本文においてであって、A系統では以下に見るように、道誓による願書の偽作はなかったと読むことができる。よって、道誓の謀計は当初の本文であるB系統において、より明確に描かれているといえるのである。

これに対してA系統の本文では、幕府転覆の張本人として畠山が登場する。そして、畠山は清氏を味方に引き入れるため、志一を派遣した。長谷川氏は②の詞章を「作者の意図に反して、国清・清氏による共同の陰謀があったかにとられそうな混乱を文詞のなかに含んでいる」といわれるが、氏はA系統を本来の本文ととらえた上で、清氏に叛意はなかったと認めようとしたため、こうした説明をなされたのだろう。しかし、この間の詞章は、必ずしも混乱しているわけではない。幕府転覆の陰謀は畠山の発意だったとしても、②の記事からは、畠山と清氏の間にはすでになにかの了解があったと読むことが許されてもよいのではないか。

例えば、志一が重大事を道誓に語ったのは、「とても武軍傾かたぐ、此人々薄運なる所也見ヌかれけん」という理由からであった。厳密には、文中で清氏が畠山の陰謀に同意していたのかどうか明確には記されていない。しかし、武家が傾きがたく、畠山と清氏の薄運が志一によって見抜かれていたというこの叙述からは、二人が幕府転覆に向け、ある程度の関係を築いていたという設定になっていることが読みとれるのではなからうか。また、②の記事の最後では、作者は志一の振る舞いを、「これホと深クたのミぎられて京迄のほせられけるニ、此事共ヲあさくしく次第二のへられけるもふしぎ也」と評するが、ここに見える「此事共」や「次第二」という句からは、志一が畠山の謀叛の発意から清氏の同調までの、相当に込み入った経緯を語ったというニュアンスが窺える¹⁷。

では、こうした前提で以下記される、志一が清氏から依頼さ

れた一大事の所願の内容とは、何だったのだろうか。すでに畠山と清氏の間に陰謀に関する合意があったとするならば、それは幕府転覆のための祈願であつたと読むのが、一番自然となつてくる。そして、清氏による四海管領・義詮呪詛の願書も、道誉によつて偽作されたのではなく、清氏本人がしたためたものであつたという理解が成り立つ。つまり、A系統の本文では、②の記事が置かれることにより、本来特に明示されていなかった清氏の祈願の内容が、幕府転覆に関わるものとしてとらえ直されているのである。

それでは、なぜ本文はB系統のごときものからA系統へと改作されたのか。まず第一に、道誉が願書を捏造して、清氏謀叛の証拠に仕立てあげたという作者の意図が、ともすれば理解されなかったためだと考えることができる。道誉による願書偽作を描く『太平記』の行文は、長谷川氏も説かれるように、極めて微妙である。そうした中で、これを清氏自筆の願書だと解釈する向きがあつて、ではなぜ清氏は謀叛に走つたのかを説明するために、畠山による策謀という趣向が設定されたのとはなからうか。畠山は新田義興を謀殺し、義興怨霊によつて滅亡に至るであろうことが、巻三十四「吉野御席上北面夢之事付諸国勢帰京都事」において詳細に予告されていた人物である。いわば第三部後半部の幕府混迷の歴史を代表する人物といつてもよいだろう。ところが、畠山は巻三十五で仁木を失脚させたのちは、自身も関東へ没落。以後、滅びに向かうその動きは、断片的に語られるに過ぎなくなる。それゆえ、その不十分をも補うべく、畠山の暗躍を描く絶好の場を清氏失脚事件に見いだした

のではないかと想像される。

また、ここでの本文改訂が、結果として道誉の側に配慮された内容になっていることにも注意しておくべきだろう。B系統の本文では、道誉は願書を偽作して清氏を陥れたという内容になつてゐる。これでは道誉の計略があまりにも露骨になつてしまふため、これを憚つたのだろうか。A系統の本文では、事件はあくまでも畠山の策謀にはじまるものであり、清氏自身もこれに同調し、幕府転覆の祈願を志一に依頼する。そして、道誉は願書を偽造したのではなく、清氏の謀叛を告発した人物として描かれることになる。両系統における道誉の役割は、かくも異なるのである。長谷川氏は、A系統からB系統に改編される際に政治的圧力が加わつたのではないかと推測を示されたが、そうではあるまい。見てきたとおり、A系統の本文では、策謀の源は畠山であると明示され、清氏を讒言した道誉の行動にも、それなりの正当性が付与されることになるのである。

五、第三部後半部と細川清氏

ところで、筆者は第三部後半部のはじまりを巻三十三に認めている。そもそもこの考え方は、大森北義氏の所説にもとづくものである^①。巻三十三は足利尊氏の死を描く巻であるが、巻末に畠山による新田義興謀殺事件の顛末が記され、次巻以降の物語へと連接する。既述のように、その後の諸大名の命運は、巻三十四「吉野御席上北面夢之事付諸国勢帰京都事」に予告されている。まず、仁木や清氏については、

『太平記』巻三十六、細川清氏失脚記事の再検討

仁木右京大夫義長ヲハ菊池入道愚鑑に申付て候らへハ、い
せの国ニてゾ亡し候らハンズらん、細河サカミノ守清氏ヲ
ハ土居、得能ノ者共ニ申付て候らへバ、四国にわたりて後
亡ヒ候ベシ、

と触れられ、簡略な既述の中でその将来が見通されている。こ
れに対して畠山は、

東国ノ大将ニて罷上りて候畠山入道道誓、舍弟ヲハリノ
守已下ヲハ、殊更ニ嘖嘖強盛ノ大魔王新田左兵衛佐義興申
請て、治罰スベキ由申候ラヒつれハ、たやすかるベキニて
候、

と語られ、義興謀殺の報いを受け、凄烈な末路をたどるであろ
うことが予告される。本章段における未来予測の眼目は畠山に
置かれているといつてもよく、その記述は三人の中で最も重み
を持っている。

このことは第三部後半部の物語の中で、畠山が担う役割の重
要性をも示していよう。さきの大森氏は、第三部後半部の事件
展開の舞台回しは、畠山一人に限定することはできないとしな
がらも、

この「後半」世界は、一大事件としての〈南方侵攻作戦〉
も、つづく〈仁木の反抗・没落劇〉も、ともに畠山が仕組
んだものであるとして、事件展開を畠山との関わりで描き
すすめ、現象的には分散して生じたはずの諸事件に一つ
の筋を通そうとしているのである。

と、物語が畠山を軸に展開してゆく一面を持つことを指摘され
ている。筆者も大森氏のこの考えを敷衍して、

確かに、大規模な南軍掃討作戦、仁木、細川、そして畠山
らの離反から滅亡までの記事は、巻三十三巻末「新田左兵
衛佐義興自害事」に於いて畠山に謀殺された新田義興の怨
霊によって領導される、という構想が一貫して存している
のである。

と述べたことがある。¹⁰⁾つまり、巻三十八までの物語が、畠山の
動向を中心に構想されていると考えたのであった。しかし、第
三部後半部における畠山の役割は確かに大きいといえるのだ
が、畠山の存在をここまで過大に認めたことは、今にして思え
ば少々勇み足であつたようだ。

というのも、前節に述べたように、巻三十六以降の物語にお
いて、畠山の存在は後景に退く観があるからである。関東下向
後の畠山の動静は、巻三十六から三十八までの中で飛び飛びに
伝えられるに過ぎない。従来は甲類本に従い、清氏失脚事件
の背後に畠山の画策があつたという理解で作品を読んできたた
め、この傾向を強く感じることはなかった。だが、清氏失脚記
事において、当初畠山の要素は全くなかつたわけだから、本来
の『太平記』では巻三十六以降、策謀家としての畠山の活躍場
面は殆どなかつたことになる。よつて、畠山を軸とする物語展
開は、巻三十三から三十五の範囲で認めるのが穏当であろう。
そして、その展開を引き受けて、以後、物語の中心となるの
が、清氏の存在ではなかつたらうか。

紙幅も尽きてきたので、ここではそのことを窺う一つの例
のみとりあげる。失脚後、清氏は南朝に帰順し、一旦は義詮
を京都より逐うことに成功する。しかし、二十日のうちに南

軍は京都を撤退。清氏は四国に渡り、体制の立て直しを余儀なくされる。そして、清氏の死は巻三十八「細川清氏討死事」において記される。清氏は讃岐国白峯城に抛り、同族の細川頼之と対峙。城に迫った頼之勢に単騎軽装で挑みかかり、武勇のほどを示すが落命する。『太平記』ではその日付を康安二年七月二十四日と記しているが、ここには前章段と時間推移の点で問題がある。

前章段は足利基氏に背き、伊豆国修禪寺に籠城した畠山の降伏と逐電・滅亡を描く「畠山入道逐電事」である。神宮徴古館本では畠山の降伏を康安二年の十一月二日、逐電を同十八日、西源院本では降伏を十一月二十一日、逐電を九月十八日、流布本では降伏を九月十日、逐電を九月十八日とするように諸本に異同があるが、共通しているのは畠山の降伏・滅亡は、清氏の討死以後の出来事だということである。にもかかわらず、本話のあとと清氏討死の記事が配されているということは、清氏討死の記事を重視し、巻三十六からつづく記事の流れを締めくくろうとする意図があつたからではないか。事実、清氏の討死を受け、つづく「和田楠与箕浦軍事付兵庫在家焼事」「太元軍事」では南朝方の動きの頓挫が描かれ、巻が結ばれる。さらに巻三十九の前半では、大内・山名・仁木の帰参、芳賀の滅亡など、反足利方の活動の沈静化が物語られてゆく。このように見てくると、第三部後半部のうち、巻三十三から三十五までは畠山を軸に、巻三十六から三十八、あるいは巻三十九前半までは清氏を軸に、物語が構成されていると考えてよさそうである。

むすびにかえて

本稿では巻三十六「志一上人上洛清氏叛逆露頭即没落事」の清氏失脚記事の本文について、乙・丙類本系のものが先行するという視点に立ち、同事件を叙述する作者の意図を考えてきた。本来の『太平記』では畠山の暗躍という要素はなく、清氏は無実で、佐々木道誉の謀計によって陥れられてゆくという叙述が明白であつた。

その一方で、今回論じ尽くせなかつた課題もある。例えば、本来の『太平記』の記述では、清氏は擁護される立場にあつたといえるが、ではなぜ清氏がかかる待遇を受けるに至つたのだろうか。小川信氏は清氏の執事としての権限を考察された中で、將軍義詮の所務沙汰親裁権が仁木義長失脚以後、清氏の管掌下に置かれるようになり、清氏の権限は増大したと指摘されている。しかし、小川氏は清氏のそうした専横が義詮を擁する道誉らの反発を買い、自己の失脚をも招いたとも分析されている¹¹。今こうした視点で『太平記』を読んでみれば、清氏像は現実以上に美化されているととれることができる。

また、本来の『太平記』では、清氏排斥の立役者は道誉といふことになつていた。しかし、その叙述が成立直後、A系統の本文のごとく改められる。ここでの描写が、結果として道誉の側に配慮されたものになつていることは、見てきたとおりである。だが、だからといってA系統への本文改訂が、佐々木氏の要求に基づいてなされたと考えてよいかというと、答えは保留

『太平記』巻三十六、細川清氏失脚記事の再検討

せざるを得ない。というのも、そもそも『太平記』では、道誓の暗躍によつて諸大名が排斥される場面がしばしば描かれる。そうした中であつて、本文が全面的に改訂されるのは、今回とりあげた一段にほぼ限られるからだ。佐々木氏が成立直後の『太平記』の本文改訂に大きな圧力を加えたと考えらるならば、改作の手は他の記事にも及んでいただろう。そうした産物として、我々は天正本の存在をあげることができるとは¹²、今回のようなケースはどう考えたらよいのか。改作者の志向の問題も十分汲み取る必要があるだろう。登場人物の叙述の異同を氏族による書き入れ要求と結びつけない自由な視点で、諸本の記述を読み直す試みがあつてよいかもしれない。

およそこうした点を、今は課題として掲げておきたい。

注

- (1) 本稿では神田本（汲古書院刊影印本）を底本とし、神田本の欠巻部分については西源院本によることとした。
- (2) 長谷川端氏「細川清氏」（『太平記の研究』汲古書院、一九八二年。初出、一九六七年）。
- (3) 長谷川端氏注（2）前掲論文。および同氏「太平記の成立と難太平記」（『太平記——創造と成長——』三弥井書店、二〇〇三年。初出、一九九四年）。
- (4) 巻三十六「清氏隠謀企并子息首服事」に「將軍ノ執事細河サカミノ守清氏」と見えるのをはじめ、巻三十六「清氏已下南方勢京入公家武家没落之事」、巻三十七「当今自江州還幸事付細川清氏渡四国事」、「尾張左衛門佐通世事」に清氏を執事と称した箇所がある。
- (5) 小川信氏『足利一門守護発展史の研究』第一編第二章第一節「清氏の擡頭」一〇八頁（吉川弘文館、一九八〇年。初出、一九六八年）。
- (6) 顕著な例としては、巻頭「仁木京兆義長參宮方并太神宮御託宣之事」の冒頭の一節、「円海上人造宮天王寺并京都御祈禱之事」の大熾盛光法違乱の記事、禁裏五檀の法の記事、「南方勢即没落越前匠作禪門上洛之事」の「さらハヤかて都へせメのほれとて、越前ノ修理大夫入道連々ニ誘へられけれハ、自去比降參治定シテ、道朝子息左衛門佐三千ヨキ、近江ノ武佐寺へはせ參ル」とある一節に神田本等が傍線部のごとき詞章を持つ点、など。乙類本が甲類本に対して先行する本文を持つ巻として、ほかに巻四をあげることもできる。神宮徴古館本等が持つ具行最期・殿法印良忠の記事は、乙類本のごとき形態に増補したものと考えられる。
- (7) 「此人々」とある部分、神宮徴古館本・玄玖本は「此人」とある。この場合は、畠山の薄連を志一が悟つたことをいうのだろうか、ここは神田本・西源院本のように「此人々」とあるのが、本来の形ではなかったか。
- (8) 「此事共」の指示内容について、長谷川氏は「清氏の所願」と解釈されている。しかし、すぐ前で志一が畠山より「これホと深クたのミきられて京迄のほせられける」と説明されていることから考えても、これは畠山の発意による謀叛に関する事柄を指すものと読むべきであろう。
- (9) 大森北義氏『太平記』の構想と方法（明治書院、一九八八年）第三章第五節「下剋上」時代の行方と

『太平記』世界の終焉——第三部世界「展開部」「後半」について——」。

(10) 小秋元段「『太平記』卷三十九・四十成立試論」(『三田国文』第一七号、一九九二年)。

(11) 小川信氏注(5) 前掲書第一編第四章第二節「室町幕府管領制成立の前提」一九九〇二〇一頁。

(12) 鈴木登美恵氏「佐々木道誉をめぐる太平記の本文異同——天正本の類の増補改訂の立場について——」(『軍記と語り物』第二号、一九六四年) 参照。

(こあきもと だん・文学部助教授)